

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

会社の同僚には、子育て中の母親である女性も複数いる。彼女たちの姿を見ると、仕事をしつつ、離れた場所にいる子どもを気遣うという、論理的には相反することが両立しているのが分かる。ことさらに意識することはないまま、心の深みでもいつも子どもの存在を感じている。

ある女性には、仕事中、息子を、ある色のうぐめきとして感じていると語っていた。ここでの「色」はもちろん、内的な^{※1}イメージで、もちろんすべての人がそう感じているわけではない。

だが、ほとんどかたちを^aオビない無形の何かとして、大切な人の存在を感じることはある。離れていてもいつもそばにいてくれる感じがする、というの^①あながち比喩とばかりもいえない。大切な人は、生きているとは限らない。あの人はもうこの世にはいない。しかし、かつてよりも私の近くにいて、そうした声は、何度も聞いたことがある。

生ける者が傍らにいてのを「存在」と呼び、亡き者たち、あるいは人間を超えた者たちがそこにいてることを表現するとき、「臨在」という言葉を用いる。

大いなるものがその姿をあらわすことを意味する「光臨」という表現がある。「臨」という文字には、どこか日常の常識を突き破って何かが顕現するという語感がある。「臨む」と書いて「のぞむ」と読むが、ここで人が眼にするのは、常ならぬ何ものかだ。死に臨むことを指す「臨終」という言葉も、そう考えると意味の深みをかいま見る心地がする。

臨在するものは、しばしば、私たちの意識では捉えられないところに存在している。別な言い方をすれば、人は日々、意識では十分に捉えきれない何かによって守られている。秘められた記憶もその一つだ。^②X、記憶のほとんどは意識されていない。

どんな人のなかにも膨大な記憶が眠っている。そう語るのは^{※2}プラトンである。この哲学者にとって「知る」ということは「想い出す」ことだった。私たちは誰も、人類の記憶を内に秘めて生きている、というのである。

また、^{※3}ユング派の人々がいうように、私たちの無意識が個人に^bゾクするものだけでなく文化や時代、あるいは地域、そして人類^Y普遍へと深く開かれたものであるとすると、有史以来の「記憶」は、万人のなかに伏在^{ふくざい}している、ということになる。

想い出せないことは記憶から消えてしまったのだ、と誰かに言われるとする。即、どこからともなく湧き上がる、^{シヨウ}ドウ的、あるいは本能的な何かが、強くその言葉を否むのではないだろうか。

思い出せないものも記憶として存在する。さらにいえば、その存在が意識にのぼることがなくても、それが臨在しているのを感じている。無いのに存在する、こうした言語的にはまったく^③Zしている事象が、私たちの生活では日々、起こっている。

たとえば私の頭が（戦争）という言葉を忘れ去る時があっても、私の皮膚は（その日）を、その日からのどす黒い、ぼろぼろの道程を――そしていつ果てるとも知れぬ狂気と死への対決を――記憶し、^{はんすう}反芻し、予知しつつける。

②この一節は、伊東壮^{たけし}という人物が書いた「原爆被害者の現状と“否定”意識」という論考にあるのだが、書いたのは彼ではない。この言葉はある広島市の被爆者の手記のなかに見つけ、自らの論文の冒頭に引用したのである。

文章は、手や頭ではなく、「血」で記されなくてはならないと^{※4}ニーチェは書いているが、先に引いた言葉が、理性と知性のみによって綴^{つづ}られたものではないのは、一読して明らかだ。文字通りの意味で血によって紡がれた言葉だといってよい。

意識に刻まれた記憶は、^{はかな}儚い。時の経過とともに消えゆくのかもしれない。しかし、^③「皮膚」に刻まれた記憶は違う。それは意識とは別な、さらに深い場所で生き続ける、というのだろう。

ここで「皮膚」というのは、火傷によって黒くなった身体の一部を指すだけではない。皮膚感覚という表現が、単なる生理的感覚ではなく、それを含みつつ心情的な感覚のはたらきを意味するように、ここでの「皮膚」もまた、一つの身体的器官ではなく、人間の全存在を包含する、いわば、たましいの「皮膚」というべきものではあるまいか。ただ、私がこの一節に初めて出会ったのは、伊東の文章ではない。神谷美恵子（一九一四―一九七九）の『生きがいについて』だった。

彼女は先の一節を引きながら、ここに記されているのは、原子爆弾を生み出した現代文明への強^{きやうじん}韌なまでの否定意識だが、「この患者のことばには個人を超えた、人類的な響きがある」といい、また、「すべて外なるものを否定しても、自己だけを最後のよりどころにできるならば、人はまだそこを足場として、外のものと戦うこともできる」とも述べている。先の言葉を引きながら神谷は、別の広島の人を書いた詩を引用する。

続いているたしかに続いている
終っていないたしかに終っていない
それは あまりにも忘れたこと
ひとりひとりの過まちをおかしていたこと
平和は手をつなぐというかんたんなこと
本当の戦いは 自分自身に向かって進めていくものだとも知らうとしない。

(岩谷隆司「つづいているあやまち」)

伊東壮の論文は、一九六〇年、戦後十五年という節目の年に雑誌に発表された。岩谷の詩を含む^{※5}アンソロジー『広島詩集』は六五年に公刊されている。五十余年以上が経過した今日、私たちの「皮膚」は、あるいは「手」は、先人が感じていたように「平和」の^dキギを認識し得ているのだろうか。

知性で認識したことは論破されれば崩れ去ってしまう。しかし、「皮膚」や「手」で記憶していることの前では、どんなに^eコウミョウな論理も役に立たない。感覚は過たない。判断が誤るのである、と^{※6}ゲーテは語っている。ゲーテが感じていたのも「皮膚」感覚のたしかさと知性の脆弱さである。

④現代人は、頭脳を鍛えすぎているのかもしれない。平和をいかに打ち建てるかをめぐって論議ばかりしている。言葉を尽くして考えることが重要なのは言うまでもない。しかし、同時に他者の痛みを、歴史の痛みと「皮膚」と「手」によって交わる道を、見失ってはならない。

(若松英輔『種まく人』による)

注 ※1 イマージュ——心に思い浮かべる像や情景。イメージ。

※2 プラトン——ギリシャの哲学者(前四二七頃〜前三四七)。

※3 ユング派——心理学の一派。スイスの精神科医・心理学者、カール・グスタフ・ユング(一八七五〜一九六二)が提唱した心理学に基づいている。

※4 ニーチェ——ドイツの哲学者(一八四四〜一九〇〇)。

※5 アンソロジー——ここでは、異なる作者による作品を集めた作品集のこと。

※6 ゲーテ——ドイツの詩人・小説家・劇作家(一七四九〜一八三二)。

問1 波線部aとeのカタカナを漢字に直せ。ただし、楷書で大きく丁寧に書くこと。

問2 本文中のX・Yに当てはまる語句として最も適当なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア さらに イ たいして ウ なかなか エ なぜなら オ むしろ

問3 傍線部①「あながち比喩とばかりもいえない」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 大切な人と離れている時でも、その人のことを気遣う必要があると感じることが確かにあるということ。

イ 大切な人のことを想像したくても、その人の存在を明瞭には感じられないことが確かにあるということ。

ウ 大切な人が近くにはいなくても、その人の存在を身近なものとして感じるものが確かにあるということ。

エ 大切な人を何かにたとえたとしても、その人を表現できたと感じられないことが確かにあるということ。

オ 大切な人を忘れたくても、その人のことをどうにも忘れられないと感じることが確かにあるということ。

問4 本文中のZに当てはまる語句として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 調和 イ 実在 ウ 独立 エ 矛盾 オ 遊離

問5 傍線部②とあるが、「この一節」が本文の展開上果たしている役割についての説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア この一節の「戦争」という語によって本文前半の内容を振り返りながら、一節全体としては、これ以降で話題を大きく変えていくことを予告している。

イ この一節の「忘れ去る」という語句によって本文前半の内容をまとめながら、一節全体としては、状況の改善策をこれ以降で示すための端緒となっている。

ウ この一節の「死への対決」という語句によって本文前半の内容を退けながら、一節全体としては、これ以降で筆者独自の論を述べる布石となっている。

エ この一節の「記憶」という語によって本文前半の内容を踏まえながら、一節全体としては、話題を焦点化してこれ以降の論に円滑につなげている。

オ この一節の「反芻」という語によって本文前半の内容理解を今一度求めながら、一節全体としては、これ以降も同じ内容が繰り返されると示唆している。

問6 傍線部③「『皮膚』に刻まれた記憶は違う」とあるが、それはどういうことか、九十字以内で説明せよ。

問7 傍線部④「現代人は、頭脳を鍛えすぎている」とあるが、このような「現代人」に対して、「ゲーテ」はどのような評価をすると考えられるか。最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の説にこだわるあまりに、歴史をないがしろにしている点で愚かしい。

イ 感情で物事を判断しようとするあまりに、誤った結論を出しかねない点が不安だ。

ウ 知性を絶対視してしまうあまりに、感覚を軽視している点にもろさがある。

エ 他者をただ論破しようとするあまりに、協調性を失っている点で身勝手である。

オ 頭だけで考えて論議してしまうあまりに、かえって対立をおおる点が心配だ。

問8 次の対話文は、この文章を読んだ生徒たちによるものである。空欄に入る言葉として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

Ａさん この文章を読んで、平和の大切さについて改めて考えさせられたね。ただ、私は戦争を体験していない世代なので、その痛ましさについて戦争体験者と同じように感じるのはいまだ無理なのだと思いますよ。

Ｂさん 今、Ａさんは、「戦争を体験していない」ので「その痛ましさについて戦争体験者と同じように感じるのはいまだ無理」だと述べてくれたけれど、そういうふうに諦めるしかないのかな。

Ｃさん 私は、本文に何かヒントがあるはずだと思って、もう一度読み直した上で考えてみたんだ。確かに、。

Ａさん なるほどね。教えてくれてありがとう。

ア Ａさんのような前提に立つことは大事だけれど、だからこそ、本文で紹介された詩にもあるように、自分自身の中にあるものを直視しつつ、互いに手をつなぐための努力を不断に行っていくことが、平和の実現のためには一層重要になるのかもしれないよ

イ Ａさんのような考え方もあるとは思いますが、本文によれば、私たちの中には個人を超えるような有史以来の記憶があるのだから、自己の内面の奥底にあるそのような記憶を呼び起こせたならば、戦争経験者と同じような感覚を共有できるかもしれないよ

ウ Ａさんのような意見は論理的には分かるけれど、本文にあるように、自分の考えについて言葉を尽くして説明しようと思心掛けていれば、いつかは戦争の悲惨さを他者にも理解してもらえて、世代を超えて平和の大切さを分かち合えるかもしれないよ

エ Ａさんのような考え方もあるとは思いますが、本文にあるように、どのように平和を実現するかをめぐって現代人も議論が続いているのだから、その議論に積極的に参加することを持続ければ、戦争経験者と同じような感覚を共有できるかもしれないよ

オ Ａさんのような前提に立つことは大事だけれど、だからこそ、本文にも引用されているような戦争に関する文章や文学作品に数多く触れて、その中で示されている痛みの感覚を共有していくことが、平和の実現のためには一層重要になるのかもしれないよ

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

両親が離婚して母親と二人で暮らしているマユには、認知症になり数週間前から老人ホームに入居している祖母がいる。マユは母親と、母のお手製の弁当を持参して毎日ホームに通っていたが、祖母は次第に食べ物を受け付けなくなってきていた。

「お外、見たいの？」

しっかりとバーバの目を見て尋ねると、バーバはまた、「ふ」という音を漏らした。

じゃあ、ちょっとただだよ、そう言っつて、私はバーバの寝ているベッドを離れ、窓辺に移動する。それから、カーテンを開けた。その時、

「バーバ、もしかして、ふつて富士山の、ふ？」

ふとひらめいたのだ。その瞬間、バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた。

あまりにも当たり前存在するので見慣れてしまい、忘れそうになっているけど、私達が暮らしている町からは、富士山がよく見える。昨日まで大雨が降っていたから、空気がいつもより澄んでいるのかもしれない。富士山は、ホームの窓から見える景色の中で、しっかりとした輪郭を現わしている。

「これでいい？ バーバ、富士山が見たかったんだね」

Aカーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる。ママは、すっかり眠っているらしい。けれど、まだバーバは、「ふ、ふ」とかすかな息を出す。マユならわかつてくれるでしょ、と訴えかけるような表情で。

「見えない？ ほら、よく目をこらすと、向こうに、富士山、見えるでしょ」

バーバは口元をほころばせ、くちびるをパクパクと動かしている。

「ん？ おなか空いた？ やっぱりキャラメル食べてみる？」

そう言いかけた時、何かを思い出しそうになった。バーバのこの表情を、いつかどこかで見たことがある気がしたのだ。いつだっけ？ バーバの、Xはにかむような柔らかな表情。

あつ、そうだ。何年前かに家族みんなで、かき氷を食べに行った時だ。並んで並んで、やつと噂のかき氷にありつけた時、バーバは、言ったのだ。ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしょう、つて。①あ、そうか、そういうことか!!

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげるから！」

気がつくと、大声で叫んでいた。私が騒々しく部屋を出て行こうとした時、ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたいんだよ、絶対にそうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年前か前、みんなでかき氷を食べに行ったじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってる！ でも、行くしかないでしょっ！」

じれったくなり、つい乱暴な声を出してしまう。けれど、そうしている間にも、バーバの体に変化していくようで怖かったのだ。私は、ホームに置いてあるクーラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。廊下を走りながら、バーバが受け付けたなかったキャラメルを、口の中に放り込む。

駐輪場に停めてあった自転車にまたがり、かき氷店を目指した。大雑把に言うと、そこは、かつて家族三人で暮らしていた町の方角にある。道なら覚えていて。ただ、パパの車で通った時の記憶だから、交通量の多い幹線道路を走らなくてはいけな

い。夏休みで連休のせいか、車がかなり渋滞している。私は、Y臨機応変に歩道と車道を交互に走った。Bぐんぐんと富士山が迫

つてくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくと、猛スピードで走っていた。体が、風の一部になってしまいうさだった。

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりこども、ものすごい人だかりだ。店の前に、長い行列ができていて。どうしたら良いのだろう。このまま待っていたら、夜になってしまうかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

この店では、天然水というのを使っている。冬、プールのような所に水をためて自然の力でbコおらせ、それを切り出して保管し、かき氷にするのだ。私は今でも普通の氷との違いがよくわからないけれど、パパはその氷の味をえらく褒めていた。この氷でウイスキーの水割り作ったら、うまいだろうなあ、とか何とか言っつて。でも、今はそんな感傷にcヒタっている場合ではない。一秒でも早くバーバにかき氷を届けなければ……。

店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。Cあの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのま

つまでも同じメンバーでいることに、何の疑いももたず、ここにかき氷を口に含んだのだ。
「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の山に透明なシロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バーバにかき氷を食べさせたいだけなのに。どうしてもこんなに悲しくなってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押してくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、ここのかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。②一瞬、音という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をついて出たことに、自分でも驚いてしまう。

「③ちよつと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじさんはぶっきらぼうにそう言うのと、またくるくと機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透明なシロップをうやうやしくかけた。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車走らせる。クーラーボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またDカーテンが閉じられていて、部屋全体が暗色に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプーンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

④ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう？」

ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくり、と喉が鳴って、富士山の一部分が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。E富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねえ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かっこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、威厳たつぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそっとまぶたを閉じる。

再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、胸がどきゅんと真つ二つに折れそうになった。天井が、虹色に輝いている。もしかして……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私は、バーバの鼻先に手のひらを翳した。よかった。バーバは、生きている。

(小川糸「バーバのかき氷」による)

問1 波線部 a d の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直せ。ただし、楷書で大きく丁寧に書くこと。

問2 二重傍線部 X 「はにかむような」・Y 「臨機応変に」の本文中での語句の意味として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- | X | | Y | |
|---|---------|---|----------|
| ア | 残念そうな | ア | 後先考えずに |
| イ | 恥ずかしそうな | イ | 速度を上げて |
| ウ | 苦しそうな | ウ | とまどいながら |
| エ | うれしそうな | エ | 状況に合わせて |
| オ | 頼りなさそうな | オ | 考えていたとおり |

問3 傍線部①「あ、そうか、そういうことか!!」とあるが、「そういうこと」とはどういうことか。六十字以内で説明せよ。

問4 傍線部②「一瞬、音という音が世界から消えた」とあるが、このときのマユの心情を五十字以内で説明せよ。

問5 傍線部③「ちよつと待ってて」とあるが、このときのおじさんについて説明したものとして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 突然店に現れて大声を上げる少女を迷惑に思い、彼女が望むかき氷を渡すことによって早く店から立ち去らせたいと思っている。

イ 周囲の客も目に入らないほど切羽詰まった様子で涙を流している少女を見て気の毒に思い、無料でかき氷を作ってあげようと思っている。

ウ 並んでいる客を強引に押しのけて注文しようとする少女によほどの事情があるのだろうと思い、かき氷を作る手を休めて理由を尋ねようと思っている。

エ 一度目の呼びかけを無視した自分に臆することなく呼びかけ続ける少女に感心し、他の客には出さない特別なかき氷を提供しようと思っている。

オ 祖母のためにかき氷を買いに来たと涙をこらえながら言う少女の訴えを聞き入れ、特別に他の客に優先してかき氷を作ってあげようと思っている。

問6 傍線部④「ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる」とあるが、このときのママについて説明したものとして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア かき氷を食べることができそうにない母の様子を見て、娘が懸命になって買ってきてくれたかき氷なので、何とか食べてほしいと思いい涙をこぼしている。

イ かつては毎日のように食べていたかき氷なのに、それすらも口にすることができないほどに衰弱しきってしまった母の様子を見て気の毒に思っている。

ウ 母に手製の弁当を食べてもらえないことだけでも悲しいのに、娘の買ってきたかき氷を食べることまでも拒否されてしまったやりきれなさに涙を流している。

エ 少しでも好きなものを食べさせたいと娘がわざわざ買いに行ったのに、口を開こうとしない母のあまりの身勝手さに悔し涙を隠しきれずにいる。

オ 娘があれこれと考えて買ってきてくれたかき氷なのに、口にしてくれそうにないことで母の望んでいたものではなかったのだと思いい涙に暮れている。

問7 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 破線部 A 「カーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる」では、バーバは富士山が見たかったのだということを思いついたマユが嬉しくなっている様子が表現されている。

イ 破線部 B 「ぐんぐんと富士山が迫ってくる」では、バーバの食べたがっているかき氷を手に入れるため、自転車を走らせているマユの一生懸命さが表現されている。

ウ 破線部 C 「あの時も向日葵が満開だった」では、かき氷を食べている人々の幸せな様子をきっかけに、家族でそろってかき氷を食べた日のことを思い出しているマユの心境がうかがえる。

エ 破線部 D 「カーテンが閉じられていて、部屋全体が飴色に見える」では、かき氷を買ってきたものの、その間にバーバの身に何か起こったのではないかとというマユの不安が表現されている。

オ 破線部 E 「富士山が、オレンジ色に光っている」では、バーバがかき氷を口にくれていることに大きな喜びを感じているマユの心情がうかがえる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

近きころ、奥州にある山寺の※1 別当なりける僧、本尊を造立せんとA 年ごろ思ひくはだて、金五十両、※2 守り袋に入れ、頸に懸けて、※3 上洛しける程に、※4 駿河の国、※5 原中の宿にて、昼、水浴みける所に、この袋を忘れて、次の日の夕方、思ひ出したりけり。口惜しく、あさましかりけれども力及ばず。「今は人の物にぞ成りぬらむ。① 帰りて尋ぬともあらじ」と思ひ、上洛して空しくb げかうせむも本意無く覚えて、※6 形のごとく本尊を造り奉りて下りける。

さて、原中の宿にて、※7 下人に、「この家とこそ覚ゆれ」など言ひて、見入れて通りけるを、家の中より、若き女人ありて、「何事を仰せらるるぞ」と言ふ。「上りの時、物を忘れたりしが、この御宿と覚え候ふ事を申すなり」と言ふ。「何を御忘れ候ひけるぞ」と問ふ。その時、B あやしめて、馬より下り、「② しかじかの願を起こして、金五十両入れて候ふ守り袋を忘れたり」と、ありのままに委しく語れば、この女人、「※8 童こそ見付けて候へ」とて、※9 したためしままで取り出で、とらせければ、あまりの事にてあさましくこそ覚えけれ。さて、「これは失せたる物にてこそ候へ。十両は女房に参らせん」と言へば、「欲しくは、五十両ながらこそ引きこめ候はめ。仏の御物なり。いかが少しも給はるべきか」と言ひければ、なかなか③ とかくの子細に及ばず。

〔沙石集〕による

注 ※1 別当——寺の住職。

※2 守り袋——護符を入れる袋。ひもをつけて首に懸けた。

※3 上洛しける——都へのぼった。

※4 駿河の国——現在の静岡県中部。

※5 原中の宿——現在の沼津市にあった鎌倉時代の宿駅。

※6 形のごとく——形ばかりを整えて。

※7 下人——従者。

※8 童こそ——ここでは「私が」といった意味。

※9 したためし——ここでは「最初に僧が準備した」という意味。

問1 破線部 a 「くはだて」 b 「げかう」の読みを現代仮名遣いで答えよ。

問2 二重傍線部 A 「年ごろ」・ B 「あやしめて」の解釈として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- | | |
|------------|------------|
| A | B |
| ア 時々 | ア うれしく思つて |
| イ 長い間 | イ 困つたと思つて |
| ウ 成長してから | ウ 恥ずかしく思つて |
| エ しばらくしてから | エ 不思議に思つて |
| オ 突然に | オ 恐ろしく思つて |

問3 傍線部①「帰りて尋ぬともあらじ」とあるが、僧はどのようなことを思つたのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 原中の宿に忘れた金五十両を探しに戻るの、見当違いだろうということ。
- イ 原中の宿に忘れた金五十両を探しに戻らないと、生活ができないということ。
- ウ 原中の宿に忘れた金五十両を探しに戻れば、必ずあるはずだということ。
- エ 原中の宿に忘れた金五十両を探しに戻っても、見つからないだろうということ。
- オ 原中の宿に忘れた金五十両を探しに戻ると、時間を無駄にしようだろうということ。

問4 傍線部②「しかじかの願」とあるが、それはどのような願いか。十五字以内で説明せよ。

問5 傍線部③「とかくの子細に及ばず」とは「何とも言えなかった」という意味であるが、その理由の説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 拾った金を女人が着服せずそのまま返そうとした上に、お礼も全く受け取ろうとしなかったから。
- イ 自分が見つけた金なので全て自分のものであると女人は考えていて、僧に返そうとしなかったから。
- ウ 金は見つけた人がお礼として受け取るべきだと僧は考えていて、女人に対してその考えを譲らなかったから。
- エ 金を落とした責任は僧侶にあり、見つけてくれた女人に一部を礼として渡すべきだと下人が言うから。
- オ 落とした金は仏のもので、女人に渡したりせずその金で本尊を作るべきだと下人は思っているから。